ＡＩは敵か味方か？

巻頭言

金属労協（JCM）事務局長
梅　田　利　也

ＡＩ脅威論

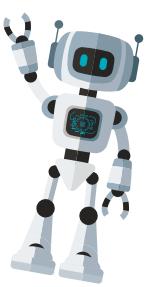
ChatGPT、Copilotなどに代表される生成ＡＩツールが普及しています。

少し前にはＡＩ脅威論が盛んに発信されており、「ＡＩに私たちの仕事が置き換えられる」というものから「ＡＩが自律的に意思を持ち人類を滅ぼす」などといったものまでありました。

今年の３月、一橋大学特任教授の市川類先生の講演を拝聴する機会に恵まれました。

「ＡＩが人類を滅ぼす」という発想には「人を創造できるのは神のみである」という欧米の宗教観が影響しており、映画「ターミネーター」に代表されるように「ロボットは人間に危害をもたらす脅威」になるという考え方です。

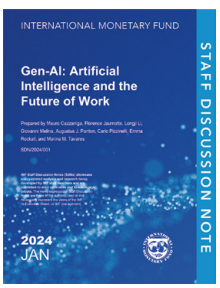
一方、私たち日本人はどうかと言えば、鉄腕アトムやドラえもんに代表されるように、「ロボットは人間の味方（友達）」という考え方が根付いているので脅威論にはなりにくいのだろうということです。



物事を考えるにあたっては、地域や文化によって個々人のバックグラウンドが異なることを念頭に置くことが必要であるとあらためて認識した次第です。

労働組合はどのように対処するのか

ＩＭＦ（国際通貨基金）の調査によれば、雇用の60％がＡＩの影響を受ける可能性があるとともに、職場における監視強化、精神的ストレスの高まりなど、ＡＩが労働者の権利にもたらすリスクがあるという結果が示されています。



ＩＭＦレポート

労働組合はＡＩに対してどのようなスタンスで臨むべきなのかについて、インダストリオール・グローバルユニオンにおいて議論が進められており、その結論づけが本年11月に開催される第4回世界大会の場で行われます。

概略としては、ＡＩの進展・活用を排除するのではなく、生産性を高めることや人手不足対策の観点からも積極的に活用すべきであり、労働組合としてもＡＩの開発・展開・規制プロセスに積極的に関与することによって労働者の権利を保護し、技術進歩の利益が公平に分配されるようにしていこうとした考え方です。

好むと好まざるとに関わらず、ＡＩの進歩は進んでいくと思います。そして働き手の不足はわが国においても大きな課題であり、インダストリオール・グローバルユニオンが提起する方向性は、私たち日本のものづくり産業に属する労働組合としても理解できるものだと考えています。

ＡＩと組合活動

金属労協が毎年開催している労働リーダーシップコースのカリキュラムの中に、テーマをいくつか設定し、金属労協の三役と議論を行う時間があります。一昨年の討論テーマの一つに「ＡＩと労働組合活動」があげられ、興味深い議論がなされていました。

最初に組合業務について「ＡＩの導入でできること／できないこと」を仕分けした後、それぞれについて深掘りするというプロセスで議論が進んでいきます。途中のやりとりなどは省略しますが、最終的には「多くの組合の仕事（役割）はＡＩに任せることができるが、組合員の想いに寄り添うといった役割はＡＩには難しい。だから私たちがしっかりと担っていこう。」としたまとめがされました。ＡＩをきっかけに、あらためて私たちの活動の原点を見つめ直すことができた良い機会であったと感じました。

リーダーシップコースで「ＡＩと労働組合活動」について議論

ＡＩは敵か味方か？

ここまでいろいろ書いてきましたが、私自身はＡＩを活用するに至っていません。

このコラムをＡＩに書いてもらったらどうなるのか。結果が怖くて二の足を踏んでいます。

ＡＩは敵か味方か？　私にとっては・・・。